

俳人協会栃木県支部会報

第30号

コロナ禍に思うく先人の恩

支部長 大高松竹

俳句界ばかりでなく日本全体が、コロナ禍を如何に乗り切るかで躍起になっている。俳人協会の主たる目的は、俳句の興隆と会員相互の親睦を図り、俳句文芸の発展に貢献するところにある。そうした中で総会も俳句大会も持てないのでは、使命を果たすことはできない。一日も早く収束の日を迎え、総会や俳句大会を開きたいことは、誰もが願っているところである。本年度の総会は、協議に協議を重ねた結果、残念ながら中止する運びになってしまった。

俳句を始めて七十余年になるが、その間一日も休まず、俳句を続けて来られたことを振り返って見ると、多くの方々から受けた恩を忘れることはできない。「健康でなければよい俳句は生まれない」これが私の持論である。先ず第一に、医者知らず薬知らずの健康な身体を授けてくれた親に、感謝しなければならぬ。第二には指導を頂いた師や先輩に礼を云わなければならぬ。多くの先生や先輩に恵まれ、県北から県南に至るまで、親しい俳句の友人を作ることができた。それぞれの方が皆、俳句をやっていて良かったという人ばかりである。結社も協会も楽しい居心地の良いところではなくてはならない。俳句をやっている目的はと問われれば、「喜びのためである」と応える。私たちの俳句活動は、糸を手繰れば、総て喜びに繋ぎ行くと行く。そうした俳句会や支部総会が、一日も早く持てるよう、皆さんと共に祈念するばかりである。

足尾銅山と先人の名吟

副支部長・事務局長 平手 ぶじえ

今春、下野新聞に「昭和の記憶」と題して、1972年頃の栃木の世相が写真と共に特集記事となった。足尾銅山が採掘を停止して銅山として歴史を閉じたのもその頃。来年は閉山50年目にあたる。コロナ禍で「自粛」が求められ、県外への移動が難しくなったことから昨秋、産業遺構足尾銅山を吟行した。銅山の歴史に精通したボランティアの案内で、町並を巡って行く、間藤駅前山口青郵の句が掲示されていた。

合歓咲きて 駅長室によき蔭を 青郵（昭和11年作）

風花やをろがみ申す山の神 〃 （昭和18年作）

銅山の栄えた戦前、俳人が訪れていたことの証である。

青郵を招いて歓迎句会が催されたにちがいない。銅山の歴史と共に、地方俳壇史の一時代を垣間見たように思えた。

さて最近になって、飯田蛇笏もまた昭和8年秋に足尾銅山の句会に招かれ、足尾の山路を吟行していたことを知った。後に刊行した『旅ゆく諷詠』には、この時の旅が詳述されている。「白雲去来の里」山廬を立出する際の心境を詠んだ（秋風やみだれてうすき雲の端）は、蛇笏俳句の真骨頂を發揮した名吟である。また文中には、「時に、人を思い、人を愁い、人を親しみ、人を嘆ずるその事がなかなかに押さえ難い無限の力をもって迫り来ることを感ずる。（中略）さればこそ、千里の遙かなる人を思い」と句友への情を記している。（冬ぬくく友愛をわがこころの灯）と詠んだ蛇笏晩年の境地にも相通じるところがあり興味深い。

足尾への吟行をきっかけに、「自粛」という先の見通せない日常であればこそ県内を丁寧歩き、地方俳壇史に残された先人の足跡と名吟に触れてゆきたいと思った。

俳句の力

副支部長 蓮 實 淳 夫

俳句は世界最短詩形である文芸にも拘わらず、今や愛好者は全世界と言つてもいいほどに広がっています。そして、この文化の発生源である日本においては、あらゆる年齢層に浸透しており、国民文芸の様相を呈している状態です。その様子の一端を紹介しましょう。

栃木県北の黒羽という小さな城下町は、芭蕉が「おくのほそ道」の旅で最も長い十三泊十四日間滞在した場所として知られています。それを記念して旧黒羽町（現大田原市）では「芭蕉の館」という施設を黒羽城三の丸跡に作りました。更に「黒羽芭蕉の里全国俳句大会」を始めました。令和三年度で三十二回目となります。今年も、ほぼ全県から二千句以上の応募がありました。黒羽と言う片田舎で実施している俳句大会ですが、俳人協会会員の皆様を初めとし、多くの俳句愛好者のご支援をいただき、全国大会の名に恥じない規模に発展して来ました。

なお、この行事を支えている実行委員は、大田原市内にある様々な俳句会の会員で構成されています。仕事は膨大ですが、すべてボランティア活動であります。なお、実行委員の皆様には、市内の小学校で実施している俳句出前講座の講師にもなっていたいただいております。市内の小中学生を対象にした俳句大会には毎年全校から三千五百句以上の応募があり、俳句出前講座の成果が現れています。全国俳句大会の選者五名の中のお一人には、大会翌日に、希望する小学校へ出向いての俳句の指導をお願いしています。

更に、俳句大会当日には、オープニングセレモニーとして、小学生による英語俳句の発表会も取り入れることにしました。かくして、俳句という文化の力が地域社会に良い影響を及ぼしてくれる様になって来ました。素晴らしきかな俳句の力です。

俳句は超多忙な日常と併存出来る

副支部長 落 合 惑 水

私が俳句を作りだしたのは、佐高生の時代で、母が栃木県の俳誌「鬼怒」の会員だったので、その見様見真似からである。

仕事の現役時代には、日立製作所栃木工場で冷蔵庫とルームエアコンの現場の生産設備を担当し、塑性加工という分野で超多忙に仕事をこなして来た。冷蔵庫部品加工の設備を開発し論文を書いて塑性加工学会の論文賞を貰ったり、熱交換器の製造設備の特許で、秋篠宮ご夫妻の出席された、全国発明賞の表彰を受けたりもした。

おまけに興味の蛾の研究では、土曜日毎に車で栃木県内の各地の電灯の点いているトンネル、電話ボックス、トイレ等を回り、蛾を採集した。こんな中でも、工場の文芸誌に俳句を発表していた。

しかし工場の文芸誌は出たり出なかつたりするので、俳句が続かない。仕事の友達が短歌の結社に属し、きちんと発表しているのを見て嘆くと、その友達が、当時短歌もやっていた俳誌「紺」の鈴木一陽編集長を紹介してくれた。そこで、早速「紺」に入会した。

私の名は和泉なので、その名で投句したら女性と間違えられ期待されたのだが、それでは困るので女性らしくない号とするため、和泉を湧水としようとしたが、もっと大きく、水の惑星地球にちなんで惑水という号にし、「紺」の座に加えて頂き現在に至っている。

退職後も、蛾の研究は続け、今も、とちぎ昆虫愛好会の「インセクト」誌に論文を出している。また那須御用邸の蛾の調査に通った時も多忙であった。県立博物館発行「那須御用邸の動植物相」の発刊記念には、仲間と当時の天皇から御所でご馳走して頂いた。

私の人生は工学や昆虫学で超多忙だったが、結社のお陰で俳句を続けて来られた。各方面の仕事で超多忙な方々も、俳句を始められ自己表現としての俳句の喜びを味わって頂きたいと願っている。

名水の里

副支部長 亀田 やす子

私の住む田舎（出流原町）はかつて農地の土地改良が為されず、昔のままの田圃で畦川はゆるやかな曲がりが続くところである。湧水が流れ来る畦川の今、黄菖蒲が点在し眼前を白鷺が飛び、葦切の高鳴きや足元で蛙が鳴いている。音なく流れる川底には蜆貝が棲み、早くは一月から蜆採りが来る。この散策路が私の独り吟行を樂しむ所である。

歩き進み、名水豆腐工場の傍を通り抜け、名水百選の「出流原弁天池」に出る。磯山（石灰山）の岩間から湧き出る水は絶えることなく碧く透明で大きな鯉が泳いでいる。

磯山の中腹に宇賀の神と弁財天を祀つてある弁天堂があり、御堂の裏側は大きな岩が風穴堂になっていて夏は涼気が楽しめる。池の近くの石積みいしづみの小高い所に松尾芭蕉の句碑が立っていて

このあたり目に見ゆるもの皆涼し

この句碑は寛政五年に建てられたもので、当時の文人数名の名が刻まれているが判読出来ない。この芭蕉の句を調べた事がある。

鶴飼つるかいで有名な岐阜市の長良川の長良橋袂の老舗旅館「十八楼」に同一の句碑があり、岐阜市観光課の資料の一部を引用する。

「句は中川原新田の油商・賀島善右衛門邸にあつた水楼から長良川を見渡し、その景色の美しさに感動、中国の代表的景観である瀟湘八景と西湖十景を合わせたほどの風情がこの水楼を渡る涼風にある」と記してある。

芭蕉没後百回忌で全国に句碑が建立されたと聞く。当事の文人は弁天池の囲りの山紫水明の景色にこの場所を選んだのであろう。

池の傍のホテルで八月には暑氣払吟行句会を行つていたが暫く御預けである。

ワクチンの接種が進んではいるが安心出来ない。落ち着いて俳句に精進して行きたい。

卯の花や高きに御座す弁財天 やす子

俳聖の地

副支部長 木多 芙美子

私の結社「春燈」では本部主催の一泊吟行勉強会の他に、以前より行つて来た関西大会がありました。この大会は支部長の逝去やその他諸般の事情により、平成二十六年を最後に終るということとなりました。最後なので芭蕉生誕の地三重県伊賀上野市で行われました。私も句友五人で前泊をし、俳聖芭蕉の地に初めて行くことが出来ました。

観光案内所に行く「芭蕉さんですか」「忍者ですか」と聞かれ、忍者の里でもあります。町の人達は今だに「芭蕉さん」と親しみを込め大事にされています。

伊賀上野市は四方を山に囲まれた盆地の城下町で、藤堂高虎の築いた三十米もある高石垣で囲まれている城で、石垣の美しさで有名であります。二十九歳までこの地に暮した芭蕉の原風景が感じられる城下町であることに納得しました。

上野城公園には俳聖殿、芭蕉翁記念館、そして伊賀流忍者博物館などあり、古い松の威様に圧倒されました。町には芭蕉生家が残されており、芭蕉の暮っていた釣月軒も現存しています。芭蕉家の菩提寺には、古塚と今もつて翁を称えています。又芭蕉が訪れ（みの虫の音をききにこよ草の庵」と詠んだので『蓑虫庵』と名付けられた、服部土芳の結んだ庵もあり苔むした庭には、芭蕉堂、わらじ塚、古池塚その他沢山の句碑が建てられ私達を迎えてくれました。別棟では茶会が行なわれて町の文化の高さを感じられ大変に奥ゆかしい町でした。面白かったのは日曜日ということもあり、貸衣裳で忍者になった親子づれが登城して来ました。

〈清和なる木の香水の香伊賀上野〉上山永晃（一献にしのお面影みどりの夜）木多芙美子 名古屋駅より高速バスで一時間で行ける処なのでもう一度訪れてみたいと思つています。お薦めの吟行地でもあります。

事務局からのお知らせ

令和3年総会後の事務上の諸連絡の受付は、左記のとおり分担致します。

1. 入退会、住所変更、所属結社の変更など会員名簿に関する連絡

星 揚子

〒320-0827

宇都宮市花房1-1-26

TEL 028(633)0220

2. 会計に関すること

岡田 幸子

〒320-0017

宇都宮市戸祭台11-8

TEL 090(5576)8552

『栃木吟行案内』申込先

〒169-8521

東京都新宿区百人町3-28-10

公益社団法人 俳人協会 吟行案内係

TEL 03-3367-6621

FAX 03-3367-6656

頒価 一、五〇〇円(税込)

送料 一冊三〇〇円

(2冊以上はお問合せください)

振替 00160-2-273

予告

俳人協会栃木県支部

令和4年賀詞交歓俳句大会

日時 令和4年2月6日(日) 午後1時開会

会場 宇都宮市内(会場未定)

主管 南風

諸事情により、変更が生じた場合は御了承ください。
詳細は後日、支部会員・賛助会員に郵送でご案内致します。

謹悼

俳人協会栃木県支部会員で、次の方々がご逝去されました。

謹んで哀悼の意を表しますと共に、ご冥福をお祈りいたします。

山口 生石 様 小竹 灯栖 様 駒形祐右子 様

松田 富夫 様

編集後記

令和2年度は新型コロナウイルスの蔓延により、俳人協会栃木県支部のほとんどの行事が中止になりました。

会報第30号は、支部長と5名の副支部長の随想を特集してみました。今までは異なった趣きを味わっていただけでしたら幸いです。

星 揚子

発行日 令和3年7月

編集 俳人協会栃木県支部事務局

〒320-0072

宇都宮市若草3-7-24

TEL 028-625-2005

平手 ふじえ方